「大事な忘れもの」

（「公明選挙時報」1961/2/5より転載）

東大教授　小池辰雄

日本には何が欠けているかとたずねたら、人々はさてと思案するかも知れない。都会のデパートには何でもあるからである。ものは何でもあって、人間もなかなか気がいい国民のようである。しかしその半面情実の多い国であることはどうも事実のようだ。これが悪循環をしてどうにもならない面がある。またこれを利用して世の成功者となる者が少なくないといった調子である。公明選挙が強く叫ばれねばならないのも、こういう欠陥から来ている。

一体こういった欠陥はどういうところに根本原因があるのであろうか。人間がいとなむことはそれが政治、経済、事業、教育、学問、医業、商売、等々何ごとであれ、また社会機構がどうであろうと、主体はどこまでも人間である。人間が人間らしく言動する問題は社会との関連における個人の自由と責任の道徳問題に帰する。自由と責任をもたない個人というようなものは人格体ではなく、真の人間たるに価しない。

ここまでは誰でも合点がいくはずである。ところがわかっていてそれがなかなか改まらないところに人間のかなしさ、なさけなさ、みじめさがある。私はこの短文に「大事な忘れもの」と題した。一体「忘」という文字が不思議な文字である。亡き心と書く。すなわち、忘れるとは心が失せていることらしい。たしかに忘れものをするときは、心が何かにとらわれてそこにないときである。我ら日本人は心そのものを忘れてはいないか。目に見、耳に聞き、口に味わい、鼻に嗅ぎ、手に触れる世界にはえらく敏感で何のかのとなかなか多弁であるが、心そのものが忘れられて真剣に問題とされていない。そこに大欠陥がある。

心の世界は、慧可が達磨大師に答えたように、「心をもとむるについに得べからざる」世界、すなわち対象化し得ない世界でありながら、一切の人間のいとなみの源泉、原動力の世界である。すなわち日本人は、真に文化をして文化たらしめ、個人道徳や社会秩序をしてその実あらしめる原動力たる高次の宗教を大方忘れているといっても過言ではあるまい。なかなか優秀なをもった大和民族であるが心に天来の火を点ずることを忘れている。実にこの大事な忘れものをしているために、偉大な光を放ち得ないでいる。惜しみて余りある国民性である。

法然、親鸞、道元、白穏、日蓮等々、偉大な仏僧を生んだ日本ではないか。釈迦の道か、キリストの福音か、いずれにもせよ高次な宗教心を胸三寸の中に宿すことを忘れなさるなと、私は若き人々に警告したい。また全国の教育者がそこに心眼を開き宗教を説くのではなく、身につけた宗教心からおのずから開花する教育をするのでなければ、真の教育は成就し難いとおもう。